様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ６ 月　 ６ 日現在

機関番号：３２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０８７０

研究課題名（和文）第二次世界大戦期、米英両国の世界地理認識の比較研究―地図史研究の方法論を用いて―

研究課題名（英文）Comparative Study on the differences of world geographical views between the United States and the United Kingdom, during the Second World War--- From the Perspective of Cartographic Research Methods

研究代表者
高田　馨里（Kaori, Takada）

大妻女子大学・比較文化学部・准教授

研究者番号：４０４３８１７２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：2014年度夏季に米国立公文書館と米連邦議会図書館、2015年度夏季に英国立公文書館と英国図書館で資料調査を行った。収集した史料・文献に基づき、2015年5月17日に富山大学で開催された日本西洋史学会で学会報告を、また同年10月17日に福島大学で行われた政治経済学・経済史学会秋季学術大会でパネル報告を行った。2015年度の研究成果を「第二次世界大戦期、アメリカ軍の標的地図」として、また2016年度に「第二次世界大戦期、米英同盟による地図作成―『斜角遠近法標的地図（ギアリングスの地図）』を中心に―」として研究成果を発表した。

研究成果の概要（英文）：I researched primary sources in Washington DC in summer 2014 and in London in summer 2015. Based on the researches, I presented papers at a conference of the Japanese Society of Western History held in the University of Toyama, May 17, 2015, and at another conference of Political Economy & Economic History Society held in the University of Fukushima. Both papers were published as bulletin papers, "The American War epitomized in Cartographical Images:The Target Charts of US armed foeces during World War II(2015)," and "Anglo-American Map Making during World War II: On Oblique Perspective Target Maps (Geerlings Maps)(2016)" published in bulletin of the Department of Comparative Culture, Otsuma Women's University.

研究分野：人文学

キーワード：西洋史　アメリカ史　軍事史　地図史　航空史

１．研究開始当初の背景

本研究の端緒となった研究は、アメリカ合衆国における地理認識の転換について分析した、応募者の 2002 年と 2005 年に発表した二つの論稿［高田馨里「第二次大戦期、アメリカ合衆国における新しい『世界観』の広がり―「航空時代の教育」の普及努力を中心に」、『歴史学研究』、第 759 号、2002 年、19-35 頁；高田馨里「第二次世界大戦期、アメリカ合衆国における『一つの世界』像の登場―視覚史料としての地図、広告、空爆写真の考察を中心に」、『駿台史学』、125 号、2005 年、47-67 頁］であり、これらの論稿は、博士論文を改編して出版した単著に含まれている。［高田馨里、有志舎、『オープンスカイ・ディプロマシー　アメリカ軍事民間航空外交 1938～1946 年』、2011 年の第一章「アメリカ人にとっての『航空時代の到来』」、第二章「空の図像学」、20-76 頁］。この後、応募者は、新たに蓄積されつつあったアメリカ合衆国における研究業績を参照し、また地図等の一次史料を収集することによって、第二次世界大戦期のアメリカ合衆国で地理学者ならびに地図作成者が軍事動員されたプロセスを考察した。[拙稿「大型地球儀が象徴する戦争―第二次世界大戦期、アメリカ合衆国における世界地理認識の転換―」、『駿台史学』、第 147 号、169-201 頁]。これまでの調査研究において、米英連合国が、それぞれヨーロッパ・太平洋戦線において地図作成を分担し、共有した事実を見出したが、イギリスにおける地図作成状況やその普及状況に関しては、調査が及ばなかった。こうした背景から、申請者は、第二次世界大戦期に作成された地図の比較分析によって、米英両国で第二次世界大戦期に普及が目指された世界地図の分析を通じて、世界観の類似・相違を明らかにしようとした。

２．研究の目的

（１）研究目的

本研究は、地図史学の方法論を歴史研究に導入することによって、第二次世界大戦から冷戦初期にアメリカ合衆国及びイギリスにおける世界地図の製図法の変化と新しい地図の普及過程を考察し、第一に、戦後世界秩序をめぐる米英両国の競合関係を考察、第二に、冷戦初期における米英両国の政治指導者の世界認識の相違と類似性を検証することを目的としている。本研究では、従来の「地政学」のイデオロギーに縛られることなく、米英の戦後構想の相違や対立点・世界地理に関する知識の相違・地図製図法に象徴される「世界観」の違いと類似性を検証し、アメリカ外交史、米英関係史・国際関係史の分析過程における地図史学の方法論の有用性を提起したい。

（２）研究の学術的背景

1935 年にイギリスで創刊され、世界各国の古地図、地図製図法の変容、地図に連関した思想史などの研究成果の発表の場となってきた学術誌 *Imago Mundi* に象徴されるように、欧米において歴史学と地図を連関させる視点は新規なものではなく、これまで多くの研究が蓄積されてきた。しかしこうした方法論を実践する研究者のほとんどは地理学者、地図史研究者であり、これらの成果がわが国の歴史研究者によって参照され、活用されることは比較的少なかったのといえるのではないだろうか。1980 年代初頭の「新しい文化史」やそれ以降の「文化的転回」という学問潮流の中で、イギリスの地理学研究者Ｊ・ブライアン・ハーレーは、美術史学における象徴・表象分析方法を地図分析に適用し、歴史学と地図史学を融合させる方法論を提起した。ハーレーは、批評理論が地図のディスコースを分析するうえで有用であること、地図はイコノロジー的に分析できること、さらに地図も「権力としての知」を象徴するものであることと主張し、「商業的であれ、公的なものであれ、地図の政策手段は支配的集団によって独占されてきた」と提起した。[J. Brian Harley, “Maps, Knowledge, and Power,” in *The Iconography of Landscape: Essays on the Symbolic representation, design and use of past environment*, edited by Denis Cosgrove and Stephen Daniels (Cambridge University Press, 1988), pp. 277-312.] 以後、ハーレーの提起を受け、1990 年代、新しい地図史学は、わが国にも紹介されることになった。[長谷川孝治「地図史研究の現在―1980 年代以降の英米動向を中心に」『人文地理学』、45-2、1993 年、156-177 頁.]　1990 年代初頭において、地図を史料として用いる方法論が提起され、地図史学に関する研究成果は、歴史学や地理学研究においてなされてきたものの「大学の紀要類や史学・地理学・科学史・洋学史等の雑誌・論集に散在」しているに過ぎない状況が指摘された。［鈴木純子「地図史料学小考」『お茶の水地理』、第 35 号、1994 年、1-11 頁］。実際、わが国における地図史学は、歴史研究においても、地理研究においても周辺的分野であり、過去に作成された地図を史料として分析する研究は比較的少ない。

他方、アメリカ合衆国では、地図史学者アラン・K・ヘンリクソンが、アメリカ外交政策の転換と地理認識の変容と連関させた論稿を発表し[Alan K. Henrikson, "Map as an 'Idea': The Role of Cartographical Imagery during the Second World War," *The American Cartographer*, 2-1 (1975), pp. 19-53] 、この研究成果は、1980 年代後半から進展した文化史や社会史を導入するアメリカ外交史研究の再考過程において注目され、ヘンリクソンは、アメリカ外交政策分析過程に、政策決定者の「認知地図（Mental Map）」を分析する方法論を提案している。[Alan K. Henrikson, "Mental Maps". In: Hogan, Michael J. ed., *Explaining the*

History of American Foreign Relations (Cambridge, 1991), pp. 177-192.].以後、アメリカ合衆国では、1990 年代以降、歴史研究者、地理学者、地図史研究者が地図史学的方法論を導入し、社会史、外交史研究を蓄積してきた。

以上の問題点及び学術的背景を踏まえ、本研究が明らかにしようとする点は、以下の三点である。第一に、米英連合国間での地図作成とその共有、戦略的のみならず戦後を見据えた戦後秩序構想における地図解釈の相違と類似点を分析することを目的とする。ここでは、第二次世界大戦以前の米英両国における伝統的な地理認識を検証したうえで分析を進める。第二に、米英両国の戦略や戦後構想に、どの程度、両国指導部の地理認識の相違が影響していたのかを考察する。第三に、米英両国が目指す戦後世界秩序が、両国民にどのように共有が促されたのか、そのプロセスを明らかにすることである。

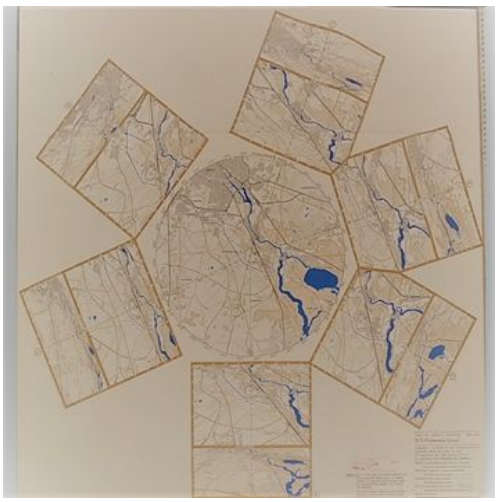
３．研究の方法

本研究の方法として、国内における文献・論文調査に加え、米英両国における公文書館・研究図書館等の地図・文書コレクションを調査して、地図史料や国家的な地理関連部局の史料の調査・収集を行った。本研究は、調査対象国がアメリカ合衆国とイギリスの二か国になるため、初年度である平成 26 年度にはアメリカ合衆国の、次年度にあたる平成 27 年度にはイギリスの公文書館で地図やその他史料調査・収集を行った。これら史料調査・収集とともに、米英両国における地図史研究に関する新たな研究動向に関してまとめ、研究動向論文・研究成果として論文を発表した。さらに平成 28 年度は、申請者が英国図書館で見出した地図の作成過程を確認するために、再度、イギリスにおいて、英国図書館ならびに英国国立公文書館での史料調査を行った。

４．研究成果

1 年目の研究調査を踏まえて、2 年目においては学会での報告を重視した。2015 年 5 月 17 日、富山大学で開催された日本西洋史学会の現代史部会で研究成果を報告した。その際、地図史を研究する若手研究者と交流し、秋に行われる学会パネルを組むことになった。その後、夏季にイギリスでの調査に従事し、英国図書館の地図室で、米英両国の地図作成者が協力して作成した、ヨーロッパ戦線で用いられたという精密爆撃地図（斜角遠近法標的地図：Oblique Perspective Target Map)を発見することができた。

この地図は、アメリカ合衆国の第二次世界大戦関連研究などで言及されていることはあったにもかかわらず実物が掲載されておらず、また昨年の米国立公文書館・連邦議会図書館での調査では、所蔵を確認できなかった地図であった。爆撃機による標的への侵入経路を５～６方向から記したこの地図は、おそらくは、作成されたイギリスにおいてのみ所蔵されてきたのではないかと考えられる。この発見した地図の作成過程については、英国立公文書館での調査でイギリス航空相の史料の中で、作成者並びに作成プロセスを記した史料を見つけることができた。この地図の発見により、本来の研究目的であった「米英の世界観の比較」ではなく、米英両国による戦略爆撃地図の共同制作過程に調査対象が広がることになった。



（British Library, Map Room 所蔵）

これらの調査研究成果について、2015 年 10 月 17 日～18 日に福島大学で開催された政治経済学・経済史学会においてパネル・ディスカッション C を行った。報告者は、石橋悠人氏（当時は新潟大学、現在は中央大学所属）、後藤敦史氏（大阪観光大学）、申請者であり、討論者を小野塚知二氏（東京大学）、司会を左近幸村氏（新潟大学）にお願いした。報告者はそれぞれ地図史を研究しており、活発に意見交換ができた。さらに、パネル・ディスカッションに参加してくださったさまざまな分野の研究者の方にご意見をいただき、地図史研究継続への手ごたえを得ることができた。とくに、地図史研究の第一人者であり、国立国会図書館で地図資料を担当されていた鈴木純子先生との知見を得ることができた。これらの調査に基づき研究成果となる論文を発表することができた。

しかしながら、平成 28 年度のイギリスにおける調査でさらなる課題が明らかになった。この斜角遠近法標的地図を作製した米陸軍航空軍の担当者が、どのような経緯で選抜されたのか、また彼のチームがどのようにイギリス側の地図作成チームと協力したのかなど、さらなる課題が浮上したのである。地図作成に至るまでのプロセスは米軍の精密爆撃戦略との連関で調査しなければならないことであり、そのため改めて米陸軍航空軍諜報部の史料調査が必要となった。それゆえ最終年度は、国内において文献・論文などの資料調査を行い、またオンライン上で資料を

検索し、これからの史料調査準備を開始した。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）
高田馨里、「第二次世界大戦期、米英同盟による地図作成 ： 「斜角遠近法標的地図(ギアリングスの地図)」を中心に」、『大妻比較文化』、査読なし、17 巻、2016 年、55-70 頁。
ISSN: 1345-4307
http://ci.nii.ac.jp/naid/110010040969

高田馨里、「地図から読み解くアメリカの戦争 ： 第二次世界大戦期、アメリカ軍の「標的地図」、『大妻比較文化』、査読なし、16 巻、2016 年、62-71 頁。
ISSN：1345-4307
http://ci.nii.ac.jp/naid/110009920457

〔学会発表〕（計２件）
高田馨里、「第二次世界大戦期、アメリカ合衆国による世界の地図化」（パネル・ディスカッション「地図製作の政治学―19 世紀～20 世紀のヘゲモニー」）、政治経済学・経済史学会、2015 年 10 月 17 日（土）、福島大学（福島県福島市）。
http://seikeisi.ssoj.info/Annual_Meeting15_program.pdf

高田馨里、「地図化される世界―第二次世界大戦期、米戦略情報局の地図作成部門の組織化とその役割」、日本西洋史学会、2015 年 5 月 17 日、富山大学（富山県富山市）。
http://seiyoushigakkai.org/2015/prog5.pdf

ホームページ等
大妻女子大学研究者データベース
http://www.gakuin.otsuma.ac.jp/teacher_search/teacher/detail.php?id=279

Researchmap
http://researchmap.jp/read0156421/

６．研究組織
(1)研究代表者　高田　馨里（TAKADA Kaori）
　　大妻女子大学・比較文化学部・准教授
　研究者番号：４０４３８１７２